狂ひの攻撃を押し續けて來たのである

日本の資本主義も又、世界資本主義の縮図でありその最も弱き部分に屬する限り、恐慌に依って最も深い痛手を負ったのである。緊縮政策も産業合理化政策も没落を急ぐ資本主義の前には何等用をなさず、遂にはインフレーション（通貨膨張）政策に依り、労働者農民大衆に新らしき犠牲を強要して來たのである。即ち非常時匡救に名を藉り発行された莫大な紙幣は、その殆んど全てが資本家地主の救済に費はれ、インフレーション実施の當然の結果として物價は急激に騰貴し、現に日用品も増々高くなって來てゐるのだ。そして此の相対的な賃銀低下が我々プロレタリアートの生活を更にそれだけ窮乏化せしめてゐるのを見よ。

加之、滿洲上海事変以來ブルジョアジー政府は此の全般的窮乏時

代に戦時的な軍備の充実を策し、十数億円の赤字予算を編成して迄巨大な軍備費を支出し、一層吾等を極度の貧窮化に追ひやらんとしてゐるのだ。斯くて吾々日本の労働者は賃下げ、馘首と物價騰貴の両方から強く攻撃されて將に餓死線上に迄追ひやられんとしてゐるのだ。

一般的交通産業特に大阪市電の状勢

交通産業と其の金融資本主義の支配下にある限り、此の恐慌の嵐から除外されるべき筈はなく、曾つては不景氣の影響を蒙る事の比較的少なく、市の一般会計をも潤大なるだけ、一部無智なる従業員をして「どんなに不景氣でも、お役所に這入居れば影響なく結構だ」と安心せしめてゐた電車事業も、昭和三年頃より現はれた赤字は逐年倍加増大し、本年に至っては東京市電は四百五十万円の赤字に財政的破綻を来し遂に千百余名の馘首と一切の手当廃止その他に依る収入二割低下の殺人的一大弾圧となって現はれ大阪市電も又二百三十万円の赤字を予想され將に東京